

6-4-3 の塁審のメカニック

2022/05/07

ノーアウト走者 1 塁で、打者の打球はショートゴロ、遊撃手は打球を捕り、2 塁に送球した。塁審は際どいジャッジだったと判断したのだろう。パンチアウトでコールしたが、ピボットマンがすぐ 1 塁に転送したため送球について行くことができなかったがセーフのコールをした。ジャッジは間違っていなかったが、ヒヤッとする場面であった。次のプレイをジャッジしなければならないときは、パンチアウトはタブーである。

1 塁でのオフザバッグ

2022/5/21

走者なしで 3 塁ゴロを処理した 3 塁手の送球を 1 塁手がジャンプしてキャッチした。その間に打者走者が 1 塁を駆け抜けた。塁審の私は両手を横に広げ「セーフ・オフ・ザ・バッグ」とコールした後に両手を右へ振った。その瞬間、このケースの場合、最近のアメリカのマイナーリーグでは両手を上に持ち上げるメカニクスをとっていたことを思い出した。次はそうしようと自分に言い聞かせた。

黄色のマニキュアをした投手

2022/5/29

友好会の試合で球審をした試合である。途中で選手の大規模な交代が一度あり、捕手が投手になった。私は、その交代を相手チームの監督に告げた後に、捕手から投手になった選手が黄色いマニキュアをしていたことを思い出したがそのまま投手をやらせた。試合後、その捕手のチームの監督に、捕手は黄色のマニキュアをしていたが「投手は色付きのマニキュアはだめですよ。次回は気を付けてください。」とそっと耳打ちをしておいた。監督は、「そうなんですか。」と驚いていた。

監督の抗議

2022/6/5

学童野球での出来事、1 アウト、走者 2 塁で打球は 3 遊間に転がった。走者は 3 塁へ走り、遊撃手がゴロを捕りに行ったが、レフトへ抜けて行き、2 塁打となり、2 塁走者はホームインした。その後 1 塁ダッグアウトから守備側の監督がタイムをかけて出てきた。監督の抗議を聞く前に、球審は塁審の私を呼んで 2 塁走者が遊撃手と接触していなかったかどうか確認をした。私は走者が野手の守備を妨害した様子はないと見ていたので、接触はなかったことを球審に伝えた。球審は監督に守備妨害ではないことを伝えたが、監督は納得する様

子がなかったので、更に塁審が「ナッシングです。」と伝えると監督は遊撃手に向かって、「ぶつかってなかったか」と大声で聞いた。このような状況はよくあるかもしれないが、この様な時は「我々審判団が協議して出した最終決定です。」と言い切れればいい。

サイン

2022/6/5

我々は球審が3塁に上がる状況の場合は、サインを出して合っている。走者1・3塁の場合もこのサインを出しているが、**内野ゴロの場合は、3塁に上がってはいけない。**外野へ抜けた時だけ3塁に上がるのである。何故なら、ホームのプレイの可能性が高いからだ。

今日5回の裏、1アウト走者1・3塁、0対6で後攻がリードしている場面に遭遇した。このような場合、球審のあなたならどんなサインを塁審に出すべきか考えたことがあるだろうか。打球が外野へ飛ぼうが、私なら「**ステイ**」のサインを出す。あと1点で試合が決まる重要な得点の場合には、ホームでのプレイの可能性が高いからだ。このサインを受けた塁審は、3塁はまかせろという3塁方向を指すサインを出せばいい。

野手が外野から返球されたボールを投手に手渡す時

2022/6/5

表題のような場面は、よく見かける。こんな時、我々審判は何を注意しなければならないだろうか？球審なら本塁をブラシで掃く前に、塁審なら新たなポジションへ移動しながらでも注意すべきことがある。それは、守備側のタイムと判断して宣告するかどうかである。野手が投手と**立ち止まって話し**ながらボールを渡していたら、「守備側のタイム」を宣告しなければならない。審判はとても忙しいのだ。今日もこの「守備側のタイム」を宣告した。しかし、友好会ではタイムは何度でもとれるそうだ。

インングの合間の姿勢

2022/6/5

インングの合間に塁審は、ある場所で立っている。その姿勢がだらしなく見えてしまうことで我々は不利益を被ることがしばしばある。際どい判定に不信感をもたれたりするなどがそのよい例である。インングの合間の立ち姿は、両足を肩幅くらいに広げ、両足に体重を均等にかけて、胸を張って立った方が見栄えが良い。片方の足に体重をかけた休めをした姿勢は避けなければならない。かつて、私はこの立ち姿をすると前かがみになりやすかったので、富澤元セリ

一グ審判長から「両手の中指をズボンの縫い目にもっていきなさい」とよく注意されたものだ。ちなみに独立リーグでは、審判査定項目の一つにされていた。

I 氏の取り組み

2022/6/12

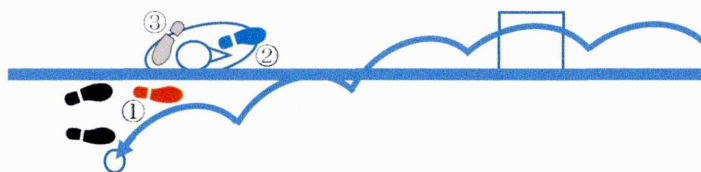
I 氏は、今日の試合には、ポーズ・リード・リアクトを意識して、試合に臨もうとしていた。走者なしの内野ゴロのときもそれを意識してやると良いとアドバイスをおいたので、外野飛球だけではなく内野ゴロの場合も真剣に取り組んでいた。試合後は、走者 1 塁でのダブルプレイのステップワークと走者 1-2 塁のそれを二人で練習をした。イメージトレーニングは大切である。我々審判員は、意識改革をして試合の中で工夫して練習をしていかなければレベルアップが難しい。さあ次の試合でどんなことを課題にし、練習していこうか。

競技中に審判員の怪我を防止するために

2022/6/15

YouTube 映像「MLB | Serious injuries of Umpires」(審判員たちの大怪我)から、どうして怪我につながったのかを検証してみた。

- (1) 1 塁塁審の大怪我(3:25~の映像)…このプレイは、ゴロの打球を捕ったショートが 1 塁へ悪送球し、1 塁塁審がフォースプレイをジャッジしようとしてハンズオンニーズで構えていたところ、悪送球が塁審のテンプルを直撃したのである。「送球が良いか悪いかを判断して、ハンズオンニーズにするかスタンディングで待つか」という基本を安易に捨てたところにこの大怪我は起因すると考える。
- (2) 3 塁塁審の怪我(4:50~の映像)…左打者の打球が 3 塁塁審の脚を直撃した事故である。塁審はファウルラインの外側で打球に当たってしまった。打球が早いので逃げきれなかったのである。大リーグの審判員ですら、ファウルラインの外側に逃げて失敗をしている例をよく見かける。上図のやり方は、投球する瞬間に外側の足を一步前に踏み出し、自分に向かってくる打球には、更に内側の足をフェア地域に踏み入れて半身で打球をすかせ、ゴロなら、すぐポイントを入れる。ライナーなら



足の位置はそのまま上半身をひねり、顔をライン上におき外野に向けてポイントを出す。1塁塁審の時は、ステップの脚は逆である。ライン際の飛球については、ポーズ・リード・リアクトの時でも打球から絶対に目を切ってはいけない。

現場での話し合い

2022/6/18

走者 2 塁で投手がキャッチャーズボックスの外にいる捕手に投球した場合、ボークが適用されるのかという質問が出た。ボークの項目は、6.02(a)にあるが、その中で(12)に明記してある内容は、「故意四球が企図されたときに投手がキャッチャーズボックスの外にいる捕手に投球した場合」ボークを適用することが明記してある。そして、その【注】には、「…捕手が片足でもボックスの外に出して居れば本項が適用される」とある。しかし、申告敬遠が適用されるようになってから、この場面は少なくなった。以前でも、これを適用したのは捕手が^{そんきよ}蹲踞の姿勢で足を出していた場合には適用せず、投球前から立った姿勢でこれに該当した場合に限り適用していた。だから、走者 2 塁では^{もちろん}勿論ましてや投球前から蹲踞の姿勢をとっていれば問題はない。

試合後に珍しく

2022/7/2

試合後の反省が長引いてしまいグラウンドを見ると、ホームチームの練習が行われていた。1アウト走者 2・3 塁でボールカウント 2 ボール 1 ストライクからの実戦形式である。監督にお願いして球審に入らせてもらった。ストライクゾーンの確認とホームでのプレイの位置取りの練習をすることができた。一緒に練習して下さった同僚の審判にもこの紙面でお礼を述べたい。